

開幕まで10か月を切った「愛・地球博」(2005年日本国際博覧会。3月25日〜9月25日)。世界100か国以上の人が集う今世紀最初の国際博覧会として期待を集めています。185日間の開催期間中、来場者に満足が残るように「過」してもらおうと活動するのが、延べ10万人にも上るボランティア。

このボランティアを組織する「愛・地球博ボランティアセンター」の顧問に、本学の小林素文学長が就任しました。このセンターの実務を取り仕切る経営企画委員長である本学の榎田教授と、スタッフとして働く本学卒業生に話を聞きました。



文化創造学部 榎田勝利教授

2万5000人のボランティアが登録

●ボランティアセンター発足の経緯は。

榎田教授 万博開催が決まってから、市民参加という形で万博を盛り上げようという気運が各地で生まれましました。そこで博覧会協会とは別に自

調査や説明会を行ってきたので、徐々に関心が高まったのではないかと思います。またこの1年間には、ボランティアをまとめる約900人のボランティアアリーダーを養成する研修を行ってきました。

開催中は1人最低5日間以上、長久手と瀬戸の2つの会場で1日500

〜600人のボランティアに活動してもらいます。応募のとき、活動内容や日時の希望を出してもらったのですが、約半年間にわたるボランティアの配置や、食事や交通費などの調整が大変です。また、今回登録した2万5000人の研修を7月から10月に行う

のですが、1会場につき100〜200人規模の研修を150回予定しており、その連絡も一苦労です。研修は愛知淑徳大学でも行います。

万博をきっかけにボランティア文化の定着を

●どんな方が登録されたのですか。

榎田教授 学生、社会人、主婦、定年退職された方、婦人会、老人会、以前からボランティア活動をしている方など、幅広いですね。社会教育のいい機会だとして生徒全員が参加する高校や、会場近辺の大学ではボランティアを単位化する動きもあります。愛知淑徳大学では、私を通して文化創造学部の100人以上が応募しました。

企業ではトヨタ自動車、デンソー、アイシン、中部電力、名鉄、東邦ガスなど多数の企業からの応募がありました。万博の期間中、ボランティアは職種や世代を超えた幅広い交流ができると思います。

●多くの人がボランティアに関心を持っているようですね。

榎田教授 きっかけさえあれば参加したいという人は大勢います。ボランティアというのには考えるだけでなく、実際に体験しないと分からない。地域にとっても自分にとっても役に立ち、楽しい。万博がきっかけになって、この地域にボランティア文化の環境を作ることができればというのが私の願いです。

●ボランティアセンターのスタッフは本学の卒業生ですね。

榎田教授 5人います。私もボランティアですが(笑)、彼らは有給職員です。私はスタッフや学生によく言っているのですが、ボランティアは将来、自分の好きなことを仕事にするためのトレーニングになる。起業してもいいし、NPO法人を作ってもいい、自分をスキルアップさせることのできる活動だと思っています。

愛知淑徳大学では現在、海外のボランティア団体でインターンシップ等を行っています。卒業生が将来、そういう分野でプロとして活躍し始めたら、愛知淑徳大学はボランティアや国際貢献分野のメッカになるのではないかと期待しています。

「愛・地球博」で延べ10万人のボランティアを組織する

立した形で活動をするためにできたのが、ボランティアセンターです。

これまでの万博の担い手というのは主催国や自治体、業者が行っていました。それをボランティアで行うというのは前例がありません。世界的にも初めてのことです。そのモデルを試行錯誤しながら作っているところです。

●実際に登録したのは何人ですか。

榎田教授 1月から3月まで公募した第一次募集では、目標の1万5000人を上回る2万5000人の応募がありました。募集を開始するまでの約3年間、学校や企業、民間団体等に、ボランティアに関するヒアリング

調査や説明会を行ってきたので、徐々に関心が高まったのではないかと思います。またこの1年間には、ボランティアをまとめる約900人のボランティアアリーダーを養成する研修を行ってきました。

開催中は1人最低5日間以上、長久手と瀬戸の2つの会場で1日500〜600人のボランティアに活動してもらいます。応募のとき、活動内容や日時の希望を出してもらったのですが、約半年間にわたるボランティアの配置や、食事や交通費などの調整が大変です。また、今回登録した2万5000人の研修を7月から10月に行うのですが、1会場につき100〜200人規模の研修を150回予定しており、その連絡も一苦労です。研修は愛知淑徳大学でも行います。

企業ではトヨタ自動車、デンソー、アイシン、中部電力、名鉄、東邦ガスなど多数の企業からの応募がありました。万博の期間中、ボランティアは職種や世代を超えた幅広い交流ができると思います。

●多くの人がボランティアに関心を持っているようですね。

榎田教授 きっかけさえあれば参加したいという人は大勢います。ボランティアというのには考えるだけでなく、実際に体験しないと分からない。地域にとっても自分にとっても役に立ち、楽しい。万博がきっかけになって、この地域にボランティア文化の環境を作ることができればというのが私の願いです。



渡邊文人さん (大学院現代社会研究科 2001年修了)

大学院では地域の活性化や街づくりが研究テーマでした。市民参加のネットワークをいかに作るか、情報をいかに行き渡らせるか、万博を契機に考えたいとスタッフに応募しました。現在は情報を担当しています。万博が終わったあとも、地域にボランティアの環境を残して次代につないでいくことが、ボランティアセンターの使命ではないかと思っています。



原あすかさん (文学部英文学科 2003年卒業)

在学中はボランティアサークルASUGANに所属していました。現在は研修担当で、日程や会場の調整、講師の依頼などの仕事のほか、淑徳大学の学生と一緒に小中学校でのワークショップに出かけています。今は7月からの一般研修の調整に追われています。卒業後1年目で多くの人と出会え、多くのエネルギーをもらっていると感じています。



野村晃輔さん (文学部英文学科 2000年卒業)

3、4年生のとき、NPOのインターンシップでアメリカへ行きました。現在は参加支援担当で、説明会やフォーラムを担当しています。福祉、環境、国際などの分野で多くの人との出会いがありました。将来の夢はボランティアやNPOのマネージメントの専門家になることなので、自分の関心のある分野で働ける今の仕事は、大いに役立っていると思います。



本学出身のボランティアセンタースタッフ